

《研究ノート》

## 美しい古城と宮殿から見える、もうひとつのイギリス

西野博道

Another Britain Seen from Beautiful Castles and Palaces

HIROMICHI NISHINO

キーワード

城 (castle, burg, fort, fortress, fortification, tower house), 宮殿 (palace, house), イングランド (England), ウェールズ (Wales), スコットランド (Scotland)

abstract

This article reproduces and summarizes some of the lectures I gave at Waseda University (2003-2010). This time I will post the contents of an overview of British castles and palaces against the background of the British Isles' culture and history. Of course, it's not just a summary of books on British castles I have read so far, but an original article that adds a unique perspective and knowledge of European culture and history I have acquired through my life as a university lecturer for over 20 years. And another point I would like to say here is that I was born and grew up in Japan and I'm extremely familiar with Japanese castles. Therefore, when I look at European castles, comparisons with Japanese castles always come to mind. This time, I will not deal with the comparison of Japanese castles and English castles, but I would like to work on the essential issues and complete a paper on such a subject in a while.

### 1. イングランドの王城と宮殿

#### 1-1 イングランドとはいかなる地域か

ブリテン島はおよそ1万年以上前、ヨーロッパ大陸と陸続きであったが、その後現在の地形が形成された。紀元前5千年頃から、北アフリカを起源として南ヨーロッパに定住したイベリア人が移住し、牧畜と農耕を行った。その後、ヨーロッパより、ビーカー人が侵入し、ソールズベリーのストーンヘンジなどのストーンサークルを残す。ビーカー人も農耕牧畜に従事したが、弓矢で武装し外敵に備えた。その後、ヨーロッパ大陸中心部からケルト人が渡って来、従

来の石器・青銅器に代わり鉄器（および青銅器）を使用し、この頃最も初期の形式の城郭であるヒルフォートを丘の上に多数築いた（紀元前700～500年頃）。紀元前55～54年にローマ人カエサルが軍を率いてブリテン島に侵攻、さらに紀元43年にローマ軍が本格的に進軍し、ついにイングランド全域を征服した。ローマ軍は各地に石造りの本格的な軍事施設ローマンフォートを築き、ローマ化した大都市が多数出現した。ローマ街道 (Roman road) が造られ、スコットランドとの国境にはハドリアヌスの長城 (Hadrian's Wall) が築かれた（西暦128年）。その後、ヨーロッパ北西部から侵攻して来たゲルマン系民族に追われる形で、410年、ローマ

人はイングランドから完全撤退し、代わってジュート人、アングル人、サクソン人が、6世紀までに先住民族であるケルト人をウェールズなどの辺境の地へ追いやり、イングランドに定住した。彼らが各地に築いたのがブルグ（サクソンフォート）と呼ばれる要塞化された集落であった。アングル人が多数占める地域はアングルズランド（Anglesland）と呼ばれ、やがてイングランドと呼ばれるようになる。8世紀になると、スカンジナビア半島からヴァイキングの襲来が始まり、1016年にデンマーク王カヌートがイングランド国王となる。その後、英王は再びアングロ・サクソンとなるが、1066年、フランス・ノルマンディー公・ウィリアムによってイングランドは短期間で占領され、ウィリアムは英王・ウィリアム1世となった。以後、イングランドでは支配階級はノルマン系フランス人、一般庶民はゲルマン系となり、城の中ではフランス語、城下町ではアングロ・サクソン語が話されるようになる。アングロ・サクソン文化はやがてフランス文化と融合し、言語も同様に融合し英語となった。ウィリアム1世は各地に堅固な城（モット・ベイリー型城郭）を築き、城郭ネットワークによってイングランド全土を支配した。ジョン王（在位1199-1216）のとき、先王たちから継承されてきたフランス領を失い、内政においても王権は制限され、議会政治が生まれるきっかけとなる。エドワード1世（在位1272-1307）のとき、ウェールズを完全征服し、スコットランドへも遠征した。この時代、城は石造りとなり、各地に城郭都市が形成され、城郭・聖堂・市門・市城壁などが整えられた。エドワード3世（在位1327-77）はかつてのフランス領を求め、英仏百年戦争（1337-1453）となる。そして、英仏戦争の失政から国内で王位継承問題が発生し、ランカスター家（赤薔薇）とヨーク家（白薔薇）が争い、いわゆる薔薇戦争（1455-85）となった。最終的には赤薔薇のヘンリー7世（在位1485-1509）が勝利し、テューダー朝が始まった。次のヘンリー8世（在位1509-47）は個人的な離婚問題

に端を発し、宗教改革を断行、イングランドの近代化に成功する。王はフランス・スペインからの来襲に備え、海岸線に多くの軍事要塞を築く（ディール城など）。カトリックのメアリー女王を経て、妹のエリザベスが女王（在位1558-1603）になるとイングランドは再びプロテスタントとなり、父王の時代よりさらに国家は繁栄し、海軍は増強された。そして、当時ヨーロッパ最強と謳われたスペイン無敵艦隊をアルマダの海戦で破った（1588年）。海外進出が推し進められると、東インド会社（半官半民の国策会社）の船団はインド・中国・インドネシアを経て日本に進出し、九州平戸に商館を開設した。このとき織物や茶がイギリスに輸入され、茶は英国紅茶となるなどしたが、後に江戸幕府の政策もあり、オランダにとって代わられた。文豪ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）が活躍したのもこの時代である。エリザベス女王の死後、スコットランドのジェイムズ6世がイングランド王ジェイムズ1世となると、息子チャールズ1世は議会と対立、やがて内乱が勃発し、王は斬首（1649年）。イングランドは一時共和国となるが、王政復古しチャールズ2世が王位に就く（1660年）。18世紀、ドイツ系王室ハノーヴァー朝となり、国王はすべてジョージの名で4代続く。この間、産業革命が起き、経済的に大発展する。19世紀、国力は世界一となり、インド皇帝を兼ねたヴィクトリア女王がその象徴的存在となる。世界に植民地を開き「日の沈まぬ国」大英帝国となったが、20世紀、2つの大戦を経て、植民地は独立、21世紀となった現在、連合王国の1つとなったが、今なお、イングランドは世界をリードする先進国の中心として、その存在感を失わず、また、例えばLife Shift（100年時代の人生戦略）など、新しいライフスタイルの提唱を、絶えず世界に発信し続けている。イングランドは今や小国ではあるが、偉大な国であるといえよう。

## 1-2 イングランドの城と宮殿

一般的に、英語のカーズル（castle）は狭義

に解釈すれば「防御設備のある領主の館」であり、中世における領主とその家族・家臣の住居設備である。基本構造はタワーとかキープといわれる塔（天守）が聳え、その周囲を堀と堡塁が巡らされて城郭を形成する。しかし、城を広義に解釈すれば、各時代をとおして、戦いの拠点である砦（城砦）、大小の塔、土塁・石壁の施された防御設備、軍事要塞（城塞、軍の駐屯地）、貴族の館・宮殿（王宮）、さらには総構えの城といわれる町全体が城の構造をもつ城郭都市などが含められ、その意味する範疇はたいへん広い。ヨーロッパにおける城の発達は、中世に広まった封建制度と深く関わるが、古代においても高地性集落であるヒルフォートや、ハドリアヌスの長城やローマンフォート、スコットランドに残るブロッホなど、城を形成する要素は大方出揃っていた。16世紀から19世紀にかけてブリテン島の各地に築かれた、城造りのマナーハウスや貴族の館であるカントリーハウスなどの大邸宅も、慣習的にカースルと呼ばれるものが多い。一方、大砲攻撃の前には、中世城郭の防御能力がまったく無力となったことから、砲台を備えた軍事要塞が出現し、これらの要塞は主に外国からの侵入に備え国境沿いや海岸沿いに築かれ、軍人兵士が配属された。ここに至り、城のもっていた住居機能と防御機能は完全に二分され、それぞれが宮殿と軍事要塞として役割分担され、独自に発展していくことになる。

イングランドはブリテン島の中では最も肥沃で豊かな地域である。11世紀ノルマン人によってモット・ベイリー型城郭（カースルと呼ばれた初めての城）が初めて大陸からもたらされた。やがて城は木製から石造りとなり、石灰岩（ケント石など）を使用した南英の城は乳白色、赤砂岩で築かれた北英の城は濃いレンガ色となった。代表的な城郭には王城であるロンドン城、ウィンザー城、ドーヴァー城をはじめとして、アランデル城、ウォリック城、ケニルワース城、コニスブラ城（多角形キープ）、フラムリಂಗム城（天守のない城）、ボディアム城（14世

紀・騎士の城）、ディール城（16世紀の軍事要塞）などがある。天守（キープ）の構造は、矩形のスクエアキープ（レクタングュラーキープともいう）と円形のシェルキープの2パターンがあり、共にモット（築山）の上に築かれた木造の館（矩形）、それを防御するため巡らされた木柵（円形）が独自に発達した名残である。

16世紀以降、英国貴族は都市にタウンハウス（OED初出は1771年）を持ち、自らの領地にカントリーハウス（OED初出は1591年）を築き、冬季はタウンハウス、夏季はカントリーハウスというように、両者の間を行き来し生活するようになる。一般的に、カントリーハウスというのは大邸宅を意味し、もともとあった中世城跡に築かれたもの、古城を拡大修築してカントリーハウスと称したもの、あるいは、城の機能は無くなったがそのまま××カースルと呼称したりするものがある。他に××ホール（hall）、××パレス（palace）、××コート（court）、××アビー（abbey）と呼ばれるカントリーハウスもある。18世紀に築かれたカントリーハウスの傑作は、スコットランド出身の建築家ウィリアム・アダム、ロバート・アダム父子による、内装の美しさ・快適さを重視し、外装・外観はシンプルで、左右対称の幾何学形で構成されるケンウッド（ハウス）、ハーウッドハウス（以上イングランド）、ダフハウス、メラーステイン、カリーン城（以上スコットランド）などがある。19世紀ヴィクトリア朝時代になるとピクチャレスク（絵のように美しい）な建物が好まれるようになり、再び外観の不規則性を重んずるゴシック様式が復活する（ネオ・ゴシック様式）。この頃の傑作に、ロンドン生まれの天才建築家ウィリアム・バージェスが手がけたウェールズのカーディフ城、カステル・コッホ（廃墟再建）がある。なお、現在、英全土に残る城館のほとんどは、このヴィクトリア朝時代に修復・復元されたものである。

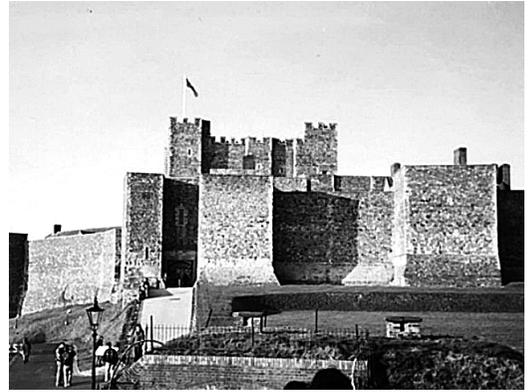
### ロンドン城 (Tower of London)



ロンドン城はイングランドの最も代表的な王宮要塞である。ローマンフォートに始まり、サクソンフォートを経て、ノルマンの城郭が築かれた。その後、歴代国王によって拡張普請が行われ、初期のスクエアキープをそのまま生かしながら、外郭をコンセントリック型の城に改造、さらに17世紀には砲台を備えた軍事要塞となった。薔薇戦争でヘンリー・チューダーに協力した貴族、あるいはまた、ヘンリー8世の宗教改革で恩恵をこうむったプロテスタント支持の商人やヘンリー8世支持の廷臣は、新領地を手にしてロンドンにタウンハウス（国元にはカントリーハウス）を築いた。かつてのカトリック教会所有地は没収され、王の臣下の屋敷が建造され、このころストランド（川岸）地域にジェントリー屋敷、ウェストミンスター宮殿付近には貴族の邸宅が多数築かれた。ヘンリー8世自身も多数の宮殿をロンドンおよびその近郊に築き、あるいは大司教から屋敷を没収し王宮とした。娘のエリザベス1世時代になると、ロンドンでは疫病が流行し（pandemic）、「密」となるシティ内の劇場は封鎖され、劣悪環境となった市内から、人々は地方へ逃れ、のちにジェームズ1世が命じたロンドンにおける新規建造物の建設禁止令、特にウェストミンスター周辺には貴族や郷土は屋敷を持つてはならないと命ずる勅令が発せられるなどした。それでも、廷臣らが長くロンドンの屋敷に滞在したことから彼らの勢力が拡大、やがて内乱が勃発

し、チャールズ1世斬首の悲劇が生まれたと指摘する歴史家もいる。

### ドーヴァー城 (Dover Castle)



ドーヴァー城は英国のヨーロッパ大陸への玄関口であるドーヴァーの断崖絶壁の上に聳える要塞である。古代・中世を経て第2次世界大戦に至るまで2千年間、常に軍事上極めて重要な拠点となった。ケルト人によってヒルフォートが築かれ、ローマ軍時代には灯台およびそれを守るフォートが築かれ、サクソン人によってブルグが築かれた。1066年、ヘイスティングズの戦いに勝利したノルマンディー公ウィリアムはドーヴァー城（モット・ベイリー）に8日間滞在している。後にスティーヴン王がドーヴァー城で死去すると、王位についたヘンリー2世はさっそく城を石造りの大要塞に改め、スクエアキープと矩形塔が巡らされた内郭部分が完成。1216年には仏軍が英国に上陸し、南部地方を制圧した後、ドーヴァー城を攻撃するが失敗している。その後ヘンリー3世の時代に北ゲイトを封鎖して巨大なコンスタブルズ・ゲイト（城代櫓門）が完成した。日本の城で言えば大手門にあたる場所に、城代が屋敷を構え敵の攻撃に備えたのである。1256年までには外郭を巡らす幕壁（カーテンウォール）と20数基の円塔が完成し、ほぼ現在見られるドーヴァー城の外観が出来上がった。18世紀には稜堡式防御（日本の五稜郭と同じ形式）が加わり、さらに地下にトンネルを巡らせ兵舎とした（沖縄の首里城地下壕

と同じ)。第2次世界大戦では、地下トンネルは軍事司令部となり、チャーチル英首相が主導した1940年のダンケルク大撤退（ダイナモ作戦）は、ここドーヴァー城で計画され実行された。

### ウィンザー城 (Windsor Castle)



ウィンザー城は、ロンドンまで20マイルの距離にあり、狩猟に最適な森林を有していたことから、歴代国王ひいきの離宮となった。宮殿としては最古といわれ、規模も英国内のみならず、世界最大級である。11世紀、ウィリアム征服王がモット・ベイリー型の城を築き、12世紀、ヘンリー2世が石造りの城郭に変え、城のシンボルであるシェルキープ（天守）を築いた。13世紀、ジョン王の息子・ヘンリー3世は矩形塔に加えて多数の円塔を築いた。1642年、内乱が起こると城は議会派の手に渡り、王党派貴族たちの牢獄となる。チャールズ1世は処刑直前の最後のクリスマスの夜を、この城で過ごした。翌1月30日にロンドンで処刑されると王の遺体は再び城に戻され、聖ジョージ礼拝堂に埋葬された。王政復古の後、チャールズ2世は中世ゴシック建築物をバロック風に造り変え、雄大なロングウォークを整備した。19世紀、ジョージ4世は城を再びゴシック風（ネオ・ゴシック様式）につくりかえ、胸壁を補充し、ラウンドタワー（シェルキープのこと）や各円塔の高さを上げ、さらに新しい塔を増築、現在残る豪華絢爛な大宮殿に様変わりさせた。聖ジョージ礼拝

堂には現在、チャールズ1世を含め10人の国王の遺体が安置されている。1348年、エドワード3世がスコットランドとフランスを破った戦勝記念に制定したガーター勲章の叙勲礼拝が、今でもこの礼拝堂において定期的に行われているのは特筆に値する。

### アランデル城 (Arundel Castle)



11世紀、ロジャー・デ・モントゴメリー伯がモット・ベイリーを築城。ノルマンディー公ウィリアムがイングランド征服のため大陸からブリテン島に渡って来たとき、ノルマンディー地方の留守をあずかった功によりロジャーはウェセックス地方の3分の2の領土を与えられ、伯爵となり築城に着手した。初めは木製の城で、後に石造りに変えられた。シェルキープは1138年に完成。縄張りはウィンザー城と同型で、モットを中心にベイリーが上下に2つ備わった。西側・南側に面する大建築物は19世紀、15代ノーフォーク公のとき築かれたもの。ゲイトハウスの細い階段を上がって向かうと「マティルダ女王の間」という石造りの寒々とした簡素な部屋が残っている。ヘンリー1世の娘マティルダは、約束されていたはずの王位を叔父のステイーヴンに奪われると、大陸アンジュー地方よりイングランドに上陸して、新王に対して自らの王位継承権を主張。英国は大いに動揺し、内乱状態となる。このときマティルダはアランデル城に入城するが、王がアランデルに進軍し、城を包囲すると、彼女はイングラ

ンド西部へ逃れた。結局、ステイヴン王のあとに国王となったのはマティルダの息子のヘンリー（ヘンリー2世）であった。城は現在もノーフォーク公家の所有である。

### ウォリック城 (Warwick Castle)



ウォリック城は915年、サクソンのアルフレッド大王の娘エセルフリーダにより、デーン人の侵略に対抗するため砦として築かれたことに始まる。その後、ウィリアム1世の命によりモット・ベイリーが築かれ、12世紀に石造りとなる。ヘンリー・ド・ニューバークが初代ウォリック伯となるが、城はあくまでも王室所有で、伯爵は城代であった。1264年モンフォールの乱でシェルキープが破壊される。その後、爵位は城主の甥ウィリアム・ド・ピーチャムへわたり、ピーチャム家によってゲイトハウス、バービカン、ガイズ塔、シーザーズ塔などが造られ、現在の城のたたずまいが決定する。14代ヘンリーはウォリック公爵となるが嫡子なく、城はヘンリーの妹の夫ソールズベリー伯の息子リチャード・ネヴィル（キング・メーカー）のものとなる。薔薇戦争でリチャードが戦死すると城は婿養子のクラレンス公ジョージのものとなる。クラレンスは王冠を狙い、捕われた（シェイクスピア『リチャード3世』ではワイン樽で溺死）。リチャード3世からエドワード6世まで城は再び王家所有となる。ダッドリー家所有を経て1604年ジェイムズ1世の治世、ファルク・グレヴィル卿が城を手に入れ、大規

模な改築を行った。グレヴィル家はウール貿易で大金を得た家系である。1621年初代ブルック卿となったファルク・グレヴィルは、ケンブリッジ大卒の独身貴族であったが、ロンドンの屋敷で使用人に刺殺された。遺体はウォリックに戻され埋葬（幽霊伝説生まれる）。城は従兄弟のロバートが継承。5代ウォリック伯フランシス・リチャード・チャールズ・ガイ・グレヴィルの時代に、エドワード7世がプリンス・オヴ・ウェールズの頃より頻繁にウォリック城に遊びに来ていた。1984年にデイヴッド・ロビン・フランシス・ガイ・グレヴィルがグレヴィル家8代伯爵、15代ブルック男爵となりヘンリー・ド・ニューバークから数えると37代ウォリック伯となった。

### ケニルワース城 (Kenilworth Castle)



赤砂岩の廃墟の城はかつて広大な水濠で囲まれ、イングランドで最大規模の水城であった。12世紀ジェフリ・ド・クリントンがモット・ベイリーを築き、息子が石造りに変え、そのとき現在も残るスクエアキープが築かれた。ジョン王所有時代に2重の囲郭型ベイリーが築かれる。ヘンリー3世の妹エリナーは、レスター伯シモン・ド・モンフォールと結婚、城は夫妻のものとなる。16年後、その広大な人工湖に囲まれたケニルワース城はヘンリー3世に対する反乱の本拠地となり、1266年イギリス史上最も有名な9カ月におよぶ城をめぐる攻防戦が繰り広げられた。またこのときカーディフ城主ギル

バートが包囲したケニルワース城を見て、後にウェールズの名城ケルフィリーの水城を築くことになる。14世紀、エドワード3世の第4子で後にランカスター家の祖となるジョン・オブ・ゴントがケニルワース城を所有すると、軍事的意味合いは薄れ、大貴族の城館として変容する。エリザベス1世は寵臣レスター伯にケニルワース城を与え、自ら城を訪問。このときレスター伯は巨費を投じ、キープを改装したほか、レスターズ・ゲイトハウス、レスターズ・ステイブルなどチューダー様式の建造物を新築した。19世紀スコットランドを代表する文豪ウォルター・スコットは歴史小説『ケニルワース城』で、女王を城に招き、もてなすレスター伯の心の闇を描いている。

#### コニスブラ城 (Conisbrough Castle)



Conisbroughとはサクソン語でKing's broughすなわち「王の城」の意。ノルマン征服によって、サクソン王ハロルドの領地であったコニスブラは、ウィリアム・ド・ウォーレン（サリー伯）の所有となり、そのとき初めて現在の地にモット・ベイリーが築かれた。ウィリアム1世（征服王）の盟友であったウォーレンの孫息子の娘イザベラが、ヘンリー2世の異母兄弟のハメルンと結婚すると、ハメルンが5代伯爵として城を受け継ぎ、そのとき現存する特異なキープを築いた。構造は円塔5層キープの周囲に6つの支えが添えられており、そのため多角形キープの外観を呈している。幕壁はキープ完成

の10年後、1190年に従来の木柵に代わって築かれた。南側にバービカンとゲイトハウスがあり、要所に等間隔で円塔が聳えていた。郭内建造物としてキープの他にキッチン、ホール、チャペル、その他各種大小の部屋が幕壁に沿って建てられた。15世紀、城は無人事となり、16世紀に廃城となった。同型のキープに、リチャード1世（獅子王）が築いたフランスのガイヤール城（Chateau Gaillard）がある。

#### フラムリンガム城 (Framlingham Castle)



城はモット・ベイリーの跡地にノーフォーク伯ロジャー・ビゴッドが12世紀後半に築いたもの。塔と幕壁の組み合わせは、十字軍の遠征でローマの城壁から学んだ手法である。そのキープのない城郭内部には礼拝堂、大小広間、キッチン、納屋その他城主家族の生活に必要なすべての建物が並んでいた。幕壁にはゲイトタワーから始まり13の矩形塔が備えられていた。代々イングランド王家に対して反旗を翻していたビゴッド家は、エドワード1世にすべての領地を没収され、フラムリンガム城にはモウブレイ家が入城、のちにノーフォーク公・アランデル伯・マーシャル伯となる名門ハワード家の所有となった。エリザベス朝時代に廃城となり、一時刑務所となった。1636年、城がケンブリッジ大学ペンブルック・コレッジに渡されると、石造りの幕壁部分を除き、城内に残る大小ホール、キッチンその他の全ての木造建築物は取り壊され、救貧院が造られた。

## ボディアム城 (Bodiam Castle)



英仏百年戦争の最中、1386年から88年にかけてエドワード・ダリングリッジ卿（仏軍との戦いで武勇を馳せ、富と名声を得た騎士）が築いた当時のイングランドにおける最新型の城郭。仏軍の侵攻を防ぐ目的で、従来あったマナーハウスを籠城可能な、広い水堀と幕壁で囲まれた矩形の本格的城郭に造り変えた。堀が深く広いのは、仏軍が得意とした穴掘り攻城戦術を想定したもの。城の南北2箇所に入口があり、大手に当たる北側には3つの跳ね橋があり、パービカン（堅牢なゲイトハウス、ゲイトタワーともいう）が築かれた。四隅に円塔、その間に矩形塔が備えられ、各塔は高い幕壁で結ばれた。城内には大小ホール、チャペル、馬小屋、キッチン、城主家族の各部屋が造られ、中央はコートヤードとなっていた。英城郭史上、有終の美を飾るにふさわしい、美観と防御性を兼ね備えた完成度の高い騎士の城である。近年、マナーハウスを本格的な城に変えたのは、仏軍に対する備えでなく、領民の反乱に備えてのものであったと指摘される。築城5年前、ケント、エセックス、サセックス地方で、重税に苦しんだ農民が暴徒となり、多くのマナーハウスは打ち壊され、カンタベリーは占拠、大司教は殺害され、暴徒はロンドン城に迫ったという事件があった（ワット・タイラーの乱）。1643年の内乱を経て、共和制になると城内にあった家財調度はすべて売却され、城は廢墟となる。19世紀になるとアッシュコム男爵によって崩れた城壁は修

復され、1917年、ジョージ・カーゾン卿が城を買い取り、木造部分も含め本格的に城を修復した。1925年カーゾン卿の死と共に城はナショナル・トラストに寄付された。

## ディール城 (Deal Castle)



1531年、ヘンリー8世の断行した宗教改革によりローマ・カトリック教会から独立したイギリスは、ローマ教皇側に立つスペイン王国とフランス王国の同盟関係を生みださせ、その二国からの攻撃を受けることになった。この危機に直面したイギリスは南側の海岸線にウォルマー、サンダウン、ディールと連続して軍事要塞を築き、海外からの攻撃に備えた。ディール城はそのような時代背景の中で生まれた城のひとつであり、英最大の軍事要塞であった。空堀が6つの半円形の稜堡を取り囲み、さらにその内側に6つの小さい稜堡が築かれ中央に頂塔の備わった円塔キープがある。上空から眺めればちょうどテューダー朝の紋章である薔薇の花（テューダー・ローズ：ランカスター家の赤薔薇とヨーク家の白薔薇を結合させたもの）をデザインした要塞であることが分かる。それぞれの層より砲撃できるように装備されており、砲門（砲口）と銃眼の数は145基にのぼる。城内部には木造船舶に致命的打撃を与える、熱した砲弾をつくるための炉があり、空堀につながる抜け穴・サリーポートがある。大手には跳ね橋があり、入り口頭上にはマダーホール（殺人孔）が造られており、城内への侵入者を阻んだ。現在見学することのできるディール城キープ周辺

の美しい胸壁は18世紀になって城を装飾するため造り変えられたものである。

#### ウェストミンスター宮殿 (Palace of Westminster)



11世紀のエドワード懺悔王以来存在する由緒ある宮殿。ヘンリー8世の時代までは筆頭王宮として使用されたが、王が1529年にホワイトホール宮殿に移ると、ホワイトホールが筆頭王宮となり、以後、エドワード1世以来の代表制議会（1295年～）が行われる宮殿として、そのまま存続し現在に至る。現在の建物（時計塔のビッグベンやヴィクトリアタワーなど）は、ノルマン様式のウェストミンスターホールを除き、1860-70年にネオ・ゴシック様式で築造されたもの。部屋数は全部で1000以上ある。

#### ホワイトホール宮殿 (Palace of Whitehall)

もともとヨーク大司教の公邸でヨークハウスと呼ばれていたものをヘンリー8世が没収した。以来、ウィリアム3世の時代（1698年）に焼失するまで筆頭王宮であった。宮廷がセント・ジェイム宮殿に移ると、以後ホワイトホールは政府機関となる。1698年の火事ではバンケティングハウス（エリザベス1世が迎賓館として築き、ジェイムズ1世が劇場として再建、焼失後、1622年、ルネッサンス様式で再建）以外すべてが全焼。1649年、チャールズ1世はこの場所にて議会派に斬首され、1660年、息子チャールズ2世の王政復古の祝典が、同じ場所で行われた。国防省はもと宮殿の一部で、ここ

からテムズ川に出ることができ、その利便性が評価された。現在、付近に首相官邸もあり、一帯は「ホワイトホール」と呼ばれる官庁街となっている。アメリカ大統領の公邸・ホワイトハウスとホワイトホールは、ほぼ同義である。

#### セント・ジェイムズ宮殿 (St. James's Palace)

ヘンリー8世によって1530年テューダー様式の宮殿として建設。1698年、焼失したホワイトホール宮殿に代わり筆頭王宮となる。チャールズ1世の息子チャールズ2世、ジェイムズ2世、アン女王（在位1702-14）がここで生まれた。1689年の名誉革命の時点でウィリアム3世は実質的に王宮をホワイトホールからセント・ジェイムズ宮殿（およびケンジントン宮殿）に移していたともいわれる。ジョージ1世、2世、（3世）もこの宮殿を筆頭王宮とした。1809年に宮殿は焼失したが、1836年までに完全に再建された。礼拝堂とゲイトハウスはヘンリー8世当時のまま残っており、1840年にこの礼拝堂でヴィクトリア女王は結婚式を挙げた。現在は迎賓館として使用されている。

#### ハンプトンコート宮殿 (Hampton Court Palace)

1514年、ヨーク大司教トマス・ウルジーがテムズ川沿いに建てたテューダー様式の邸宅（現存する唯一の左右対称テューダー様式建造物）をヘンリー8世が気に入りウルジーに献上させ、宮殿とした。以後ジョージ2世まで200年にわたって王族の住居となった。エドワード6世はここで生まれ育った。1665年、チャールズ2世は疫病が流行した際、セント・ジェイムズ宮殿からここに避難し滞在した。ウィリアム3世、メアリー2世夫妻にとっても格別お気に入りの宮殿であり、ウィリアム王は庭園や宮殿の一部をオランダ様式に改装させている。1702年、王はハンプトンコートで落馬し、それが原因でケンジントン宮殿にて死去した。ハンプトンコートに住んだ最後の国王はジョージ2世で、以後の王族はロンドンの宮殿で過ごすようになる。ヴィクトリアが女王になった翌1838年

より一般公開された。

### グリニッジ宮殿 (Greenwich Palace)

ヘンリー5世の弟グロスター公が1427年に築いた館。ヘンリー8世はここで生まれた。アン・ブリーンは1533年、ここで後のエリザベス1世を産んだ。エドワード6世はここで死去。現存するクイーンズハウスはジェイムズ1世がデンマーク人の王妃アンにグリニッジ宮殿を与えた際、設計させたもので、1638年に完成した(アンはすでに死去)。クイーンズハウスはチャールズ1世妃(ルイ13世の妹)の館となった。王政復活によりチャールズ2世が旧宮殿を改修に着手し、ウィリアム3世が引き継ぎ、アン女王が完成させた。のちに「世界でもっとも豪華な病院」といわれた海軍病院(グリニッジ王立病院)となり、クイーンズハウスに病院長が住んでいた。その後、ポーツマスから海軍兵学校が移転し、王立海軍大学となった。東のデットフォードとウリッジにはヘンリー8世が築いた造船所があり、チャールズ2世の時代に、海軍造船所としてきわめて重要視され、当地は英国海軍発祥の地として知られるようになった。

### バッキンガム宮殿 (Buckingham Palace)



もともと1705年バッキンガム公が築いた館・バッキンガムハウスがあった。ジョージ3世がそれを買取り王妃と住み始め、この宮殿の歴史が始まった。ジョージ3世がジョンソン博士

と会談したのもこの宮殿。ジョージ4世はバッキンガムハウスをまったく新しい宮殿に改築することを指示し、1837年に現在の宮殿が完成した。ヴィクトリア女王がセント・ジェイムズ宮殿(およびケンジントン宮殿)よりここに初めて移り、以後歴代の王(女王)の王宮として現在に至る。部屋数は600以上あり、衛兵交代の儀式は観光名物となっている。セント・ジェイムズパークの池から眺める宮殿の姿は絶景である。

### ケンジントン宮殿 (Kensington Palace)

ジャコビアン様式の館。1689年、ウィリアム3世(在位1689-1702)とメアリー2世(在位1689-94)夫妻はノッテングラム伯より館を買取りロンドンの宮殿とする。メアリー2世は1694年、夫ウィリアム3世は1702年、この宮殿で死去。メアリー2世の妹アン女王もこの宮殿で亡くなっている(1714年)。初代ハノーヴァー家ジョージ1世、そして息子ジョージのジョージ2世もこの宮殿に住んでいた。ヴィクトリアは生まれも育ちも、また彼女が女王になったと知らされたのもこの宮殿であった。1841年より一般公開された庭園が、ケンジントンガーデンズであり、サーペンタイン池(ジョージ2世が1730年に造らせたもの)の向こうがハイドパークである。ピーター・パンの像があるのはケンジントンガーデンズ側である。近年では、現チャールズ皇太子と故ダイアナ元妃がこの宮殿に共に住んだことで知られる(1981-1992)。二人が正式に離婚した1996年2月以後もダイアナの居住地であった(1997年8月に元妃はパリにて交通事故死)。現在、彼女の息子ウィリアム王子とその夫人キャサリン妃、夫妻の子ジョージ王子とシャーロット王女が宮殿に住んでいる。

## 2. エドワード1世によって築かれた ウェールズの城郭ネットワーク

### 2-1 ウェールズとはいかなる地域か

ウェールズ (Wales) とは古英語 Wealas でよそ者・異国人 (foreigners) を意味し、後の支配者となるイングランド人から見た呼び名である。ウェールズの面積は、日本の四国よりやや大きい程度で、国土の6割は標高200メートル以上の山岳地帯で、牧羊が営まれ、残りの4割の平野部で農耕が行われていた。長い歴史の中で強力な国家は生まれず、人口は南ウェールズに集中している。紀元前3000年頃からピーカー人が大陸から渡来し、その後ケルト人がやって来た。紀元40年代、イングランド全域を完全征服したローマ軍は紀元70年代に、ウェールズに進軍し、78年までに支配下に置いた。5世紀、ローマ軍が撤退すると、ローマン・ケルトとなったブリトン人 (ウェールズ人) は、アイルランドやガリア (フランス) と交易し、仏からキリスト教を通じてラテン語を学び、ラテン語は後のウェールズ語 (古ウェールズ語は9~11世紀に成立) に大きな影響を与えた (なお、2020年の国勢調査では、人口の約30%、86万人がウェールズ語と英語を話すことができるといふ)。ローマ人と入れ替わり侵入して来たアングロ・サクソン人との戦いにおいて登場するブリトン人 (ウェールズ人) の英雄がアーサー王 King Arthur であり、その名は中世初期のウェールズ叙事詩『ア・ゴドディン (Y Gododdin)』に初めて登場し、アーサー王伝説に関する最古の記述である。8世紀、アングルの王国マーシアのオフア王は、ウェールズとの国境地帯に全長240キロの防塁 (オフアの防塁 Offa's Dyke) を築き、ブリトン人 (ウェールズ人) の来襲に備えた。その頃から彼らを Wealas と呼び始め、それが国名ウェールズの語源となった。9世紀のウェールズは小国分立の時代であり、その後、11世紀にノルマン人が来襲、彼らは肥沃な南東部 (平野部) を奪い、多数の城を築いた。13世紀、グウィネズ Gwynedd 王

スイウエリン・アブ・イオルウエルス Llywelyn ab Iorwerth (在位1195-1240) はウェールズの盟主となったが、イングランド王に対しては臣従の礼をとった。しかし孫のスイウエリン・アブ・グリフィズ Llywelyn ap Gruffydd (グウィネズ王) はプリンス・オヴ・ウェールズ (ウェールズ大公) を名乗り、臣従政策を放棄、英王エドワード1世に対して宣戦布告し、全面戦争を行う。その結果、大公は1282年戦死、200年間続いたイングランドに対する抵抗は終わりを告げ、以後ウェールズは英王によって完全支配された (正式には1536年、合同法によりウェールズはイングランド王国の一部となる)。ウェールズ人は中世以来、詩作や楽器 (ハープなど) 演奏、歌唱が好きで、吟唱詩人大会 (アーサー王讃美など)、合唱大会、男声合唱など国民行事として盛んに行われてきた。そして、18~19世紀、石炭産業 (イギリス産業革命を支えた) や製鉄業が栄え、やがてウェールズ人の愛国心は、政治より学問や文化に注がれるようになる。1988年より、小中学校でウェールズ語学習が義務化され、現在、公文書・地名・道路標識は英語とウェールズ語の二か国語表記となっている。グウィネズ地方では子供たちが英語を習うのは小学校に入ってからである。そして1997年、ウェールズ自治の是非を問う住民投票が行われ、カーディフにウェールズ議会 (National Assembly for Wales) と内閣が置かれ、ウェールズ自治が700年ぶりに復活。なお、ウェールズで人気のあるスポーツはサッカーとラグビーだが、特にラグビー人気は絶大で、ラグビーウェールズ代表は世界的な強豪チームであり、ウェールズ人にとっての誇りであり、アイデンティティとなっている。

### 2-2 ウェールズの中世城郭群

ウェールズは、中世ヨーロッパ城塞の頂点といわれるコンセントリック型城郭および城郭都市の宝庫と言われる。ウェールズ完全征服を目指した築城王エドワード1世の命により、名築城家ジェイムズ Master James of St George が

1283年から95年の間に築いた一連の名城（軍事要塞）は、コンウィ城（1283-89年完成）、ハーレック城（1283-89年完成）、カナーヴォン城（1283年～）、ポーマリス城（1295年～）の4城であり、これらは、絶えず反乱の拠点となったグウィネズ地方おさへの城郭ネットワークであった。他に、ヨーロッパ城郭史上最高峰の水準を誇る名城と謳われるコンセントリック型城郭のケルフィリー城、さらに、首都のカーディフ城、小型のカステル・コッホ（19世紀）など大小魅力的な城が多数残る。

### コンウィ城（Conwy Castle）



ウェールズの完全征服を誓った英王エドワード1世は、1282年の遠征にて英軍の主力部隊を北ウェールズに送り込み、ウェールズ最後の王スイウェリンをスノードン山（標高1085メートル）に追い込んだ。次第にグウィネッド地方を攻略し支配してゆく中、コンウィを手に入れたエドワード王はさっそく普請奉行ジェイムズに命じ、河口付近の岩の上に王城を築く。外壁工事も含め1283年3月から最高1500人の職人を動員し以後5年の歳月を費やし、築城費14,500ポンドで1287年秋に完成した。築城のペースは驚くべき速さで進められ、城の規模からすると当時としては画期的な天下普請であった。廃城となっていたディガンウィ城の資材が多く使われたことが築城を速めたと考えられる。エドワード王は当初コンウィ城をイングランドのウェールズ支配の拠点、政治の中心とする計画で築城

したがその計画は変更され、王城はカナーヴォンに移行した。コンウィの城下町は市城壁で囲まれた城郭都市を形成し、イングランドより商人や職人を呼び寄せ、ウェールズを経済的にも支配することとなる。1294年に起きた反乱ではエドワード王はわずかの手勢を率いてこの城で籠城、ウェールズ各地に築かれた英軍城塞に向け指令を出していた。本格的な石造りの市城壁は現在もほぼ完全な形で残る。城は黒ずんだ褐色であるが、築城当時はロンドン城のホワイトタワーのように石灰で白化粧され白城であった。コンウィ城は細長い城地の東西両側にパービカンを持ち、8つの大円塔が幕壁で結ばれた。厚い城壁で遮断された東の内郭と西の外郭は跳ね橋と埋門でつながり、非常時には内郭は独立した矩形の城郭となった。縄張りの所々にコンセントリックの手法が取り入れられ、2重の守りとなっている箇所もある。大河に面する東側のチャペル塔の下には水門があり、付近には常時船舶が逗留した。城の背後は海であり、籠城の折に物資の供給、兵の移動、他城との連絡、情報交換を容易にした。これはエドワード王が得意とした築城の定石、すなわち、機動力ある城、アクティヴな城の構築である。二つの河に挟まれた地形の先端の岩山に、このコンウィ城の中核部分が築かれると、そこからちょうど大きな三角形をつくるように長さおよそ1300メートルにおよぶ城壁で囲まれた城郭都市が形成された。地形の影響を受けて上下の高さの変化に富んだこの市城壁は重厚な石造りであり、アッパーゲイト、ロウアーゲイト、ミルゲイトの3基の巨大なゲイトハウス形式の城門と、21基のD型塔が胸壁のある幕壁でつながった。城壁の外側はさらに広大な河や人工の空堀で守られた。アッパーゲイト近くが一番高い壁上塔からは町全体が、そして湾に注がれるコンウィ川を背景とし、8基の円塔を備えるコンウェイ城がよく見える。市城壁内にはアッパーゲイト通り、チャペル通り、ベリー通り、カースル通り、ローズヒル通り、ハイ通りの6つの大通りがあり、アッパーゲイト通りと平行して

ローズマリーレインがあった。すべての家屋はこれらの通りに沿って建てられ、所狭しと、ひしめき合っていた。また町の中心部には城の方形塔を思わせる聖マリア教会がある。元々はスイウエリン大王の墓地のある寺院であったが、エドワード1世はその寺院を他へ移し、新しく教区教会として築いたのだ。スクエアキープを思わせるその石造り聖堂は有事の際、城郭の機能を果たしたと考えられる。幕壁とD型塔とゲイトハウスを備えた本格的な石造りでできた市城壁内部には、教会と一般市民の住居のほかには穀物貯蔵庫、商店街、マーケットスクエア、ギルドホールなどあった。主な市民は小売商人、貿易商人、職人であり、彼らが通りに沿って商家を造り、店を出して家族と生活した。野菜栽培用の庭園や果樹園こけらを持ち、家畜を飼う家もあった。裕福な家は柿板、タイルの屋根根であり、それ以外は茅葺きであった。のちには防火のためほとんどの家が茅葺きを止める。同業者同士は同じ通りに住み、職人らが中心となってギルド（組合）をつくった。後に学校も造られ、病院は修道士によって運営された。ゲイトキーパーは城門を夜明けに開けて、日没に閉門した。城郭都市はエドワード1世のコンウィ築城以後、本格的にイギリス全土に広がった。

### カナーヴォン城 (Caernarfon Castle)



エドワード1世がウェールズ海岸線に連続して築いた城郭ネットワークの本城であり、

ウェールズ完全征服を象徴する王城がカナーヴォン城である。この地には最初ローマ軍により石造りのフォートが築かれ、11世紀にはノルマン貴族によるモット・ベイリーの木造の城が築かれた。1282年12月、スイウエリン王が殺され、ウェールズがほぼ英支配下に置かれると、エドワード王はジェイムズに命じて1283年の6月より築城を着工。海岸線の町を包む市城壁も同時に建造された。カナーヴォン城には他のウェールズの城と違った築城方法、すなわち、コンスタンチノープルの大城壁（テオドシアン・ウォールズ）を思わせる多角形塔、白い城壁には赤砂岩を使って何本もの横縞が入ったデザインなど見られる。縄張りはコンウィ城と同じ不規則なものだが、規模はより大きく、2基の巨大ゲイトハウス、7基の巨大多角形塔が最大厚さ6メートルの幕壁で結ばれ、内部は上郭と下郭に分かれた。上郭にはノルマン貴族の盛ったモットが19世紀まで残っていた。1284年、カナーヴォン城でエドワード1世の息子（後のエドワード2世）が生まれると、家臣に向かって「ウェールズで生まれたこの王子はプリンス・オヴ・ウェールズである」と宣言した。以来、英国王室の長子はカナーヴォン城にて「プリンス・オヴ・ウェールズ」というウェールズ大公の称号を得る伝統が生まれた。1911年（プリンス・エドワード＝エドワード8世）と1969年（現チャールズ皇太子）らがその儀式を盛大に行っている。築城は長期にわたり行われたが、結局、財政問題で未完のまま現在に至っている。

城のスタイルはコンウェイ城と同形式であり、海を背景に、城内は上郭と下郭に細長く分かれている。ツインタワーを有する巨大なゲイトハウスと多角形の塔10数基が想像を絶する高さと厚みのある堅牢な幕壁で結ばれており、キープを持たない。もっともそれぞれの塔がゲイトハウスを含めてその形や機能、そして規模からしても独立したシェルキープの（変形の）ようにも思われ、城全体のイメージは見る者を圧倒する。日本の城で言えば、姫路城、和歌山

城、伊予松山城などの城郭の連立天守が天守丸（本丸）を形作る発想に相当する。カナークン城にはキープといわれる建造物はないが、実は本丸のみならず、城全体が巨大キープ化しているという解釈が可能である。この発想はフラムリング城などの成立過程を考慮すればさらに理解できる。また、ほぼ同形式で築かれたコンウィ城の城郭都市にも言えることでだが、縄張りを鳥瞰すると、実はこの2城に共通するのは、ノルマンコンクエストと前後してイングランドに定着したカースルと呼ばれる初めての城モット・ベイリーの縄張りに酷似していることである。モットに当たるところがカナークン城そのものであり、ベイリーに相当するのが堅牢なタウンウォールで囲まれた城郭都市である。エドワード1世とジェイムズが一方で、ハーレック城など限りなく完成度の高いコンセントリック型城郭を築くのと同時に、他方でウィリアム征服王以来のモット・ベイリー型の伝統的な縄張りを生かした総石壁造りによる巨大なモット・ベイリー型の城郭を考案したとも言える。ウェールズにおける王家の本城をコンウィ城からここカナークンに変更したのも、彼らの理想とする新型城郭がコンウィでは不完全なものだったことに由来するのではないか。

### ハーレック城 (Harlech Castle)



城はコンウィ城着工直後、カナークン城着工直前の1283年から1289年にかけて築かれた。海を見下ろす険しい岩（61メートル）の上には

それほど大規模ではないが、エドワード型城郭（コンセントリック型城郭）の要害堅固な城の中でも、軍事的に最も完成度の高い城として知られる。城内には大小ホール、キッチン、チャペル、製パン所、穀物倉庫、井戸などが備わった。また、海に面する急傾斜の崖に石階段があり、籠城の際に海門より船で救援物資を城内に補給できるようになっていた。ウェールズ征服後の1294年、スイウェリン王の従兄弟マドック・アップ・スイウェリン率いる反乱軍に城は攻撃されたが、カナークン城やコンウィ城より物資の補給を継続させ、落城しなかった。しかし1404年、オウアイン Owain 率いる反乱軍に攻められたとき、仏海軍に制海権を奪われ落城。城はウェールズ軍の拠点となり、オウアインはハーレック城にてプリンス・オヴ・ウェールズとして即位した。しかし4年後（1408年）英軍を率いてハーレックにやって来たもう一人のプリンス・オヴ・ウェールズことハリー（後のヘンリー5世）の攻撃によって陥落、反乱は終息し、ハーレック城も再びイングランドの持ち城となる。このとき直径560ミリの砲弾が城内に撃ち込まれた。跳ね橋やバービカンで守られた巨大なゲイトハイスは、城壁の厚さ4メートル、3つの鉄製扉、3つの落とし格子、7つの殺人孔を持つ堅牢な城門であり、ゲイトハウスはこの城のキープでもあった。城郭最大の弱点である城門が、最強の拠点キープとなるこの城造りの発想は、ヨーロッパ城郭防御の究極的到達点であり、この種の城は、理論上弱点がないことになった。左右対称の均整のとれた佇まいや内郭・外郭の幅や両城壁の高さのバランスの良さなど含め、エドワード1世とジェイムズのウェールズに築いたコンセントリック型城郭の傑作中の傑作、ウェールズ最高の名城として名高い。なお、ジェイムズは1290年から3年間ハーレック城の城代を務め、ゲイトハウス上層部、すなわちキープ・ゲイトハウスで暮らした。

### ボーマリス城 (Beaumaris Castle)

1294年マドック・アブ・スイウェリン率いる反乱軍によってウェールズに築かれた多くのイングランドの城は攻撃された。エドワード1世は反乱軍を鎮圧すると、ウェールズに築かれた城郭ネットワークをさらに強化するため、ジェームズに命じ1295年ボーマリス築城を開始。このときジェームズは60歳を越え、築城術も円熟期に達していた。2,600（そのうち1,800はdiggers）人を動員したが、周囲に何も無い緑の平地に築かれる城はそれゆえに、地理的制約を受けることなくコンセントリック型の理想的な城郭を目指して築かれた。内郭は限りなく正方形に近く、ケルフィリー城を思わせる南北2基の巨大なゲイトハウス、そしてバービカン1基が備わり、6基の大円塔（内2基はD型）が幕壁でつながれた。正八角形の外郭は12基の小円塔と2つのゲイトハウスが高さの低い幕壁でつながった。ハーレック城やケルフィリー城の造りと比べ、やや外郭の円塔の数が多く外城壁が高すぎるのは、コンセントリックの理論からすると不必要であり、かえってその機能を弱めることにもなる。おそらくこれはジェームズが城の美観、雄大さを演出しデザインしたものであろう。ウェールズ人を巨大なる美、崇高なる美によって心理的にコントロールするため巧妙に考え出された権威の象徴としての城造りであったのだろう。もちろん、外郭の極端に小さな円塔は、内郭に聳える円塔をいかにも巨大に見せるトリックである。外郭の周囲には広くて深い水堀がめぐらされ、穴掘り戦術も攻城塔の接近も寄せ付けない。また船舶の出入りのため、ドック（船渠）が海寄りのゲイトハウス下に造られた。残念ながら、ガスコニュー遠征やスコットランド征服の苦戦により財政難となったエドワード1世は、築城工事を中断せざるをえなかった。後の内乱では、城塞は再度武装化され王党派の軍事拠点となったが、1646年、議会派の攻撃を受け落城。城は未完のまま現在に至っている。

### ケルフィリー城 (Caerphilly Castle)



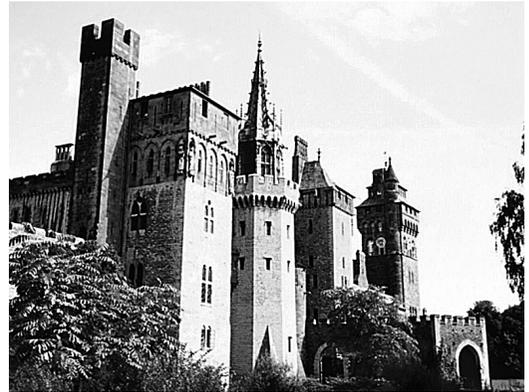
首都カーディフの北11キロ標高280メートルの高地に位置し、面積30エーカーのウェールズ最大の城郭（ヨーロッパでも第2の規模、1位はウインザー城）。ケルフィリー城はまたコンセントリック型城郭として、また、広大な人工湖を有する難攻不落の水城（浮城）として、ヨーロッパ中世城郭の名城と言われる。ケルフィリーの地は西暦75年にローマ軍によって初めてフォートが築かれ、その後、11世紀ウィリアム征服王時代にカースルが築かれた。しかし実際、ノルマン人はカーディフ周辺だけを治めるのが精一杯で、13世紀中頃まで、この地はウェールズ人の支配となっていた。その後、グロスター伯リチャード・ド・クレア（1222-62）がウェールズ人を追いやり、ケルフィリーを押さえ、後に息子ギルバートが継承する。1268年、若干25歳の若き伯爵ギルバートはケルフィリーに本格的な城塞を築き始める。すなわち、1265年のイーヴシャムの戦い（後のエドワード1世となる英皇太子エドワードが、国王ヘンリー3世に対抗して蜂起した貴族シモン・ド・モンフォールを敗死させた戦い）の後、残存する反乱軍の戦力が結集するケニルワース城に向かったギルバートは、そこに広大な湖に守られた難攻不落の浮城を見て驚愕する。その後、ギルバートはカーフィリーに本格的な城塞を築き始めるが、その広大な人工湖は、国王軍を9カ月釘付けにしたケニルワース城攻め無くしては考えられなかった。

ケルフィリー城の構造は、エドワード1世も後に模倣するほどのユニークで斬新なコンセントリック型の城郭で、内郭と外郭に城壁を二重に巡らせ、内郭には4つの巨大円塔にツインタワーを備えた東西3つのゲイトハウス、そして大広間が幕壁で矩形に繋げられた。グレイト・クレア・ゲイトハウスと呼ばれる内郭東側の城門は、ケント州にあるギルバートの父リチャード築城のトンプリッジ城のゲイトハウス（現存）を模倣して造られ、大きさやデザインはそっくりである。この形が後にエドワード1世のコンセントリック型城郭に多用されるゲイトハウスの原型であることはあまり知られていない。そして、外郭の周囲にはケニルワース城を思わせる複雑でかつ広大な人工の湖を巡らせた。流れる水をせき止めるため築かれた南北に走る巨大ダムも堅牢な控え壁で要塞化された。築城途中で城はスイウェリン王（ウェールズ大公）に率いられたウェールズ軍の攻撃を受け破壊されたが、1271年、城は完成した。その後エドワード1世の2度にわたるウェールズ遠征によってウェールズ軍は粉塵と化し、スイウェリンの死をもってウェールズ独立が絶望的となると、ケルフィリー城は前線基地からクレア家の行政府としてその機能を果すことになる。1294年、ウェールズ人が再び反乱を起こしケルフィリーの町は焼失するが城は落城せず、翌年反乱軍はイングランド軍によって鎮圧された。

エドワード2世の寵愛を受けたヒュー・ディスペンサーは、ギルバートの孫娘と結婚しケルフィリー城を手に入れるが、後に国政を混乱させたとして糾弾され、1326年、クーデターを起こした王妃イザベラによって追放されたエドワード2世と共にケルフィリー城に逃れ、王妃軍によって包囲された。脱出したディスペンサーとエドワード2世が捕えられた後も、ケルフィリー城は開城することなく籠城を続けた。それはディスペンサー家の存続を願ってのことであり、エドワード2世とヒュー・ディスペンサーは結局殺害されたが、ディスペンサー家は存続を許された。17世紀の内乱で、クロムウェ

ル軍によって城は砲撃を受け、一部「ケルフィリーの斜塔」と呼ばれるような姿となった。19世紀、カーディフ城主ビュート侯により、本格的な復元工事が進められ、涸れていた湖水も再び蓄えられ往時の姿が蘇った。

#### カーディフ城 (Cardiff Castle)



城を囲む四方の城壁はもともと1世紀後半ローマ軍が築いたフォートである。5世紀にローマ軍が撤退すると、石造りのフォートは荒廃し地中に埋もれた。11世紀、ウェールズにやって来たノルマン人ロバート・フィッツハモンは、ウェールズ南東部の王族を打ち負かし、この地にあったフォート跡の内部にモット・ベイリーの城を築いた。ロバートの娘がヘンリー1世の庶子ロバートと結婚し家を継ぐと、義父と同名のロバートが築山の上に初めて石造りのシェルキープを築いた。城はのちに甥のギルバート・ド・クレアが相続。英国議会政治の第一歩となってマグナカルタをジョン王に認めさせた有力貴族グループの一員であった。ギルバートの孫の同名ギルバートの代になるとウェールズ北方地域からの攻撃が激しくなり、ギルバートは城の補強に努め、城壁を強化、城を外郭と内郭に分けた（1271年にはケルフィリー城を築城）。1284年、エドワード1世がウェールズ征服を開始するにあたり、王女ジョーンをギルバートに差し出し進軍を開始した。1295年にギルバートは死去、同名の息子ギルバートに家督相続するがスコットランドのバ

ノックバーンの戦いで戦死（23歳）。ヒュー・デイスペンサーと結婚していたクレア家のエレノア（エドワード1世の孫娘）が城を相続し、以後百年、デイスペンサー家がカーディフ城主となる。15世紀、リチャード・デイスペンサーが死去し、妹イザベラ・デイスペンサーの夫リチャード・ピーチャムが相続。夫リチャードが1422年に死去すると、イザベラは翌年リチャードの一族・13代ウォリック伯の同名リチャード・ピーチャムと再婚。ウォリック城主でもあるリチャードはカーディフ城滞在中の城内での生活の場をシェルキープから、西側幕壁沿いに築いた建物（現在の八角塔付近）に移動した。リチャードの孫娘アンはソーズルベリー伯の嫡男リチャード・ネヴィル（ウォリック城主・キングメーカー）と結婚し再びウォリック伯の城となる。のちにカーディフ城はエドワード6世の重臣ウィリアム・ハーバートの城となるが、スコットランドのメアリー女王とノーフォーク公（アランデル城主トマス・ハワード）との結婚をたくらみ、エリザベス女王に危険視される。ウィリアム死後、息子ヘンリーは無事カーディフ城を相続。ヘンリーは城郭をさらに整備修復し宮殿化した。1601年、ヘンリーが死ぬと息子のウィリアムが相続。カーディフにはほとんどやって来なかったが、ウィリアムは市の発展に尽力し、またシェイクスピアなどの芸術家への援助を行った。1642年、内乱勃発で、カーディフ城は議会派貴族たちの手に落ちるがチャールズ1世が城の奪還に成功。1645年チャールズ1世は7月27日から1週間カーディフ城に滞在し、王党派の巻き返しを図った。1766年、城はシャーロット・ジェインから夫ジョン・ステュアート（ビュート伯の跡継ぎ息子、1792年に初代ビュート侯となる）に渡り、カーディフ城は以後、1947年カーディフ市に寄贈されるまでビュート家によって所有される。2代ビュート侯ジョン（Mount Stuart）は経済経営手腕に秀でた人物であり、石炭、鉄鉱、貿易の分野で巨額の富を得て、小さな田舎町であったカーディフに産業を起し、第2のリバプールを作

るべく近代的な産業都市に発展させた市の貢献者である。その間、城は絢爛豪華な貴族の城館に改築された。特に、19世紀のヴィクトリア朝時代、3代ビュート侯のジョン John Patrick Crichton Stuartが建築家ウィリアム・バージェスに設計を依頼して改築させたものが現存する建築物の大半を占めている。1890年にカーディフ市長となったジョンは、政治より歴史や芸術に専ら関心を示し、中世ゴシック建築に魅了された彼は、カーディフ城の他にケルフィリー城、カステル・コッホなど再建した。

### カステル・コッホ（Castell Coch）

カステル・コッホ（コッホ城）の歴史は、13世紀にクレア家のギルバートによってウェールズ人の反乱に備えカーディフ城の出城として築城されたことに始まる。15世紀には廃城となり、その後は廃墟となったが、19世紀カーディフ城主の3代ビュート侯が建築家ウィリアム・バージェスに依頼し、赤砂岩の城跡を土台にして、13世紀の城を本格的に復元した。築城に際してウィリアム・バージェスはカステル・コッホと同時代の13世紀に建てられたスイスの城やフランス・ライン河沿いの古城を参考にしてイメージを膨らませ、築造したという。キープタワー、キッチンタワー、ウェルタワー大小3つの円塔の上には、イングランドの城には無い、円錐状の三角屋根がある。13世紀のウェールズに造られた城の特徴はなく、これは堅牢なケルフィリー城と、絢爛豪華なカーディフ城を再建したビュート侯が、カステル・コッホは自らの血筋と縁あるスコットランドのタワーハウス、あるいはエレガントなフランスの城館を彷彿とさせる城にしたいという思いがあったことによるものだろう。ジョンの父2代ビュート侯は実業手腕に秀でており、現在の産業都市カーディフ市の生みの親でもある。彼の葬儀に参列した者はウィリアム4世の葬儀に参列した者の数よりも多かったというほど社会的に影響力ある人物であった。父が55歳で死去した時、ジョンはわずか生後6カ月。スコットランドで生まれ、

オックスフォードで学んだジョンは、実業家タイプの父親と異なり、21カ国語の言語をマスターする学者であり、文学、歴史、芸術、考古学、博愛主義、宗教、神秘主義、自然科学等に深く興味を持ち、また中世ウェールズの歴史に特に関心をもっていた。建築家ウィリアム・バージェスの父はロンドンに会社を営み、ビュート家と取引のある建築技師で、巨額の富を息子に相続していた。息子ウィリアムは利益追求に興味なく、建築業の他に家具、ステンドグラス、貴金属類などに手を広げた。彼は特に中世ゴシック建築に関心を寄せ、アイルランドのコーク大聖堂がその代表作といわれる。ビュート侯にカステル・コッホ再建を依頼された後、バージェスはその完成を待たずして他界した。変わり者であったバージェスは酒に溺れ、阿片を嗜み、一生独身を貫いた。

### 3. スコットランドの城と宮殿

#### 3-1 スコットランドとはいかなる地域か

スコットランドはブリテン島の北に広がる大地（約78km<sup>2</sup>／ウェールズの4倍、北海道とはほぼ同じ面積）およびその周辺の諸島から成り立つ地域である。元々、ピクト人（カレドニア人ともいうが共にケルト系ブリトン人）らが居住していた地域で、この地の征服を試みた古代ローマ帝国は「カレドニア」と呼んだ。ローマ帝国は後に、ハドリアヌスの長城（Hadrian's Wall／西暦128年完成）、そしてさらに北へ進み、アントニヌスの長城（Antonine Wall／西暦144年完成）を築きイングランドとの国境とした。しかし、160年代にはローマの支配は再びハドリアヌスの長城まで後退する。やがて、ローマ人はカレドニアを去り、その後、アイルランドからゲール人（ケルト人）、イングランド北部からアングロ・サクソン人、スカンジナビア半島からヴァイキングがやって来た。アイルランドから渡って来たケルト系（ゲール系）移民のスコット人はスコットランド北西部にダリリアダDalriada王国を築き、後の国名・ス

コットランドの語源となった。彼らは9世紀にスコットランド王国を成立させる。ノルマン・コンクエスト（1066年）以降、イングランド王国からたびたび侵略され、両者の抗争は日常化されてゆく。特に、英王エドワード1世（「スコットランド人へのハンマー」Hammer of the Scotsと呼ばれた）とウィリアム・ウォレス、英王エドワード2世（ウェールズ生まれ／バノックバーンの戦いで蘇王ロバート1世に敗北）とロバート・ブルース（のちのロバート1世）の戦いは名高い。以後、1707年までスコットランドは独立した王国であった。

スコットランドは、ケルト系の多い北部のハイランズ（the Highlands）と、イングランドからの移住者（アングロ・サクソン系、およびノルマン系）が多い平野部の南部ローランズ（the Lowlands）2つの地域に分かれる。彼らはそれぞれ高地人／ハイランダー（Highlander）低地人／ローランダー（Lowlander）と呼ばれ、高地人は格子柄タータンによって仕立てられたキルトが民族衣装であり、その武勇が有名である。人々はゲール語（Gaelic）を話したが、やがてスコットランド風にアレンジされた英語、すなわちスコッツ語（Scots）を話し、18世紀以降はイングランド人と同じ英語を話すようになる。ローランズとイングランドの国境付近はボーダーズ（Borders）と呼ばれ、政情不安定な地域であり、紛争が絶えなかったことから城（タワーハウス）が多数築かれた。

首都は城郭都市エディンバラだが、最大の都市はグラスゴーである。17世紀、ジェイムズ6世は未婚であったイングランド女王・エリザベス1世の後を継ぎ、イングランド王ジェイムズ1世となり、同君連合となった。しかし、その息子チャールズ1世は議会と対立し、内乱の後、議会派によってロンドンで処刑されてしまう。

1707年にイングランドとスコットランドの合同法（Union）が成立し、スコットランド王国は消滅。しかし、以後、現在に至るまで、スコットランド人は独立心旺盛で、20世紀の国民投票を経て、スコットランドの自治権は大幅に認め

られる。1999年、スコットランド議会（Scotland Parliament）が300年ぶりに復活。紙幣はイングランド銀行が発行するものとスコットランド銀行が発行するものと共に使うなど、彼らは、自分たちはイギリス人ではなく、スコットランド人であるという意識が絶えず根底に流れている。

スコットランド文学は、先ず、ジョン・バーバー（John Barbour）の『ブルース』*The Acts and Life of the Most Victorious Conquerour, Robert Bruce King of Scotland*（1375）が、14世紀のスコットランド文学を代表する作品であり、スコッツ語によって書かれた。ロバート1世がバノックバーンの戦いでイングランド軍に大勝し、祖国独立を勝ち取る話である。そして、18世紀に国民詩人ロバート・バーンズ（Robert Burns）が登場する。バーンズはスコッツ語を駆使し、自然と労働、清貧、酒と女をその作品の主題とした。19世紀には、歴史小説家ウォルター・スコット（Sir Walter Scott）、詩人バイロン卿（Lord Byron、父親はノルマン系イングランド人で、母はスチュアート王家の血を引くスコットランドの貴族、幼少期をアバディーンで過ごす）が登場する。ヴィクトリア朝時代になると、スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson）、コナン・ドイル（Sir Arthur Conan Doyle）らが登場し、20世紀にかけて『ピーター・パン』（初演1904年）の作者バリ（Sir James Matthew Barrie, 1st Baronet）らが登場した。ウェールズでは音楽芸術が栄え、スコットランドでは文学が花開いた。共にケルト人気質の賜である。

### 3-2 タワーハウスの宝庫、スコットランド

歴史的にスコットランド王国は、ヨーロッパ諸国の中でも小国であり、経済的に貧しい地域であった。それでもスコットランドの領主らは来客を城に招き、ホールで吟遊詩人の歌、あるいはバグパイプの演奏を聞き、夜通し大量の酒（ウイスキー）を飲み、過分にもてなしを行ったことで知られる。城はスコットランド人にとって殺伐たる戦いのシンボルであると同時に、

社交の場、文化と遊興のシンボルであった。そのスコットランドに残る城の数は現在1000程度、廃墟も含めれば1500～3000城と言われる。その数は、ブリテン島全体では城の数が5000と考えれば、その割合は相当の数にのぼる。そして、17世紀まで、さらに現在までも住居として使われている城も多く、城の時代がイングランドに比べて200～300年ほど長かった事実もあり、その分、スコットランド独自の文化が城の佇まいに大きく影響を与えた。城郭として、様々なスタイルが生まれ、特に、14世紀以降出現するタワーハウス（tower house）と呼ばれる小型の城郭建造物は、その多様性と美的価値において、ヨーロッパ中を見渡しても、比類なき傑作が多数残る。



タワーハウス1 ブローティ城（15世紀）



タワーハウス2 ハンティングタワー（15世紀）



タワーハウス3 クレイポッツ城 (16世紀)

16世紀、メアリー女王(1542-67)の不安定な政権運営が続くと、防御設備を重視する小規模な城、タワーハウスが急増する結果を生んだ。全体としては軍事要塞としての城郭から、快適な住居としての城館への流れは、この時代、決定的なものであり、また、従来領主は、領国にある多数の城に城代を配置し、城から城へ一族を連れて移動しながら生活していたが、納税方法が合理化されると移動もなくなり、その結果、一つの城に家具や寝具を豪華に揃え、装飾や佇まいを楽しむことが可能になった。また、宗教改革によって新たに土地を教会から手に入れた貴族たちも多数現れ、彼らは競ってタワーハウスの新築・改造に着手し、その創意工夫を競った。ジェームズ6世の同君連合(1603年)によって、スコットランドに強力で安定した政権が誕生し、国土に平和がもたらされると、スコットランドにおいても城の防御設備の機能は薄れ、胸壁や銃口なども装飾性が重視され、住居としての快適さと豪華さを求めるものとなった。城の窓は採光用に広くなり、以前のような圧迫感のある小さな窓はなくなった。遊歩道や庭園をそなえた、明るく、広々としたタワーハウス、カントリーハウスが多数築かれることになる。また、フランスは勿論のこと、イタリアやスペインの影響を受けた、大陸ルネサンス風の城館も現れることになった。スコットランドを旅すると、至るところで必ず目に留まるロマンティックな貴族の館、ピクチャレスク

な(絵のように美しい)廃墟の城は、そのほとんどがタワーハウスであるといつてよい。

### エディンバラ城 (Edinburgh Castle)



城郭のある岩山はールドタウンに続く東側が緩やかな坂になっている以外、他のどこの面も急な絶壁となっており、ニュータウン側にはかつて広大な湖が水堀として存在していた。城はスコットランド王家ゆかりの王城であり、スコットランドを代表する大城郭ではあるが、現在の城はイングランドの軍事要塞としてのエディンバラ城であり、建造物の殆どは18世紀のものである。先史時代より城砦が造られ、11世紀、マクベスに殺害されたダンカン王の嫡子マルコム3世がイングランドのエドワード懺悔王の姪マーガレットと結婚し、その末子デイヴィッド1世がのちに母を偲び、城内で一番高い部分にノルマン様式の礼拝堂(聖マーガレット礼拝堂)を建立、現存する城内の建築物の中で最古のものとなる。英王ヘンリー2世はスコットランド王ウィリアムの臣従を得るとエディンバラ城を要塞化して12年間イングランドの持城とした。エドワード1世の時代も城は英軍の要塞であったが、エドワード2世時代、ロバート・ブルース以下わずか30名の奇襲によって城は奪還された。ロバート・ブルースは独立戦争の過程で焦土戦を展開したため、エディンバラ城も聖マーガレット礼拝堂以外の建物は全て取り壊されている。1513年フロッデンの戦い(蘇王ジェームズ4世戦死)後、英軍侵入を危

惧してオールドタウンは城壁で囲まれ、このとき総構えが完成した。1650年代、クロムウェル軍に占領された後、王宮エディンバラ城は兵舎として様変わりし、18世紀までには砲撃を視野に入れた軍事要塞としての改築工事がほぼ完了している。現在、大手門広場はエディンバラ・フェスティバル期間中、大規模なステージが設けられ、軍楽隊の演奏パレード（military tatum）が行われている。

### スターリング城（Stirling Castle）



スコットランドのほぼ中央、ハイランズとローランズを睨むその地理的条件から、城はスコットランドの鍵（the key to Scotland）と呼ばれていた。実際、すぐ近くにウィリアム・ウォレス軍の勝利したスターリング・ブリッジの戦い（1297年）、ロバート1世（ロバート・ブルース）の勝利したバノックバーンの戦い（1314年）の古戦場があり、スターリング城がスコットランド王国の存亡を決定づける重要な拠点であったことが窺える。12世紀には岩山に城が存在していたと言われるが、現在のスターリング城の規模は、城が王宮として機能した15世紀以降のもので、ジェームズ4世が築いたゲイトハウス、グレートホール（1999年復元）、チャペルロイヤル、16世紀にジェームズ5世がフランス・ルネッサンス様式をとりいれて築いた宮殿などがある。ジェームズ3世はこの城で生まれ、ジェームズ5世は1歳、メアリー女王は生後6日、ジェームズ6世は1歳で戴冠式を

城内チャペルロイヤルで行っている。1603年ジェームズ6世がイングランド国王ジェームズ1世となりスコットランドを離れると、スターリング城は王宮としての役割を終え、以後軍事要塞として機能する。同君連合以後、ジャコバイトの反乱に代表される数々の武力蜂起、さらには18世紀から19世紀にかけてのナポレオン戦争など、スコットランドは不安定な政情が続き、スターリング城はエディンバラ城同様、英政府の軍駐屯地として、中世以来の城郭施設は、近代的な兵舎や砲台に改造された。なお、スターリング城ゲイトハウス寄りにアーガイル邸（Argyll's Lodging）と呼ばれる美しい城造りの屋敷・タウンハウスが存在する。このフランス・ルネッサンス様式の城館を築いたのは、1630年代、初代スターリング伯サー・ウィリアム・アレグザンダーである。

### ボズウェル城（Bothwell Castle）



赤砂岩の廃墟の城・ボズウェル城は、1255年王家の遠縁にあたるサー・ウォルター・ドゥ・モレイヴィアとその息子ウィリアムがその富と権力の象徴として、クライド川を見下ろす岩山の上に築いた城である。城は巨大で堅牢、実戦的な城郭であった。軍勢を多数収容できる広大なコートヤードがあり、赤砂岩の円形天守（ドンジョン）は高さ90フィート、直径65フィートあり、壁の厚さ15フィートある。幕壁でコートヤードを囲み、さらに円塔と矩形塔が数基備えられた。ウィリアム・ウォリスはボズウェル城

を14カ月にわたって包囲し、籠城する英軍を壊滅状態に追い込んだが、1301年、城は再びエドワード1世の軍勢（6800人）に包囲され、猛攻を受けた末1カ月で落城。このとき英軍はベルフリーと呼ばれる木製の移動可能な巨大井楼である攻城塔、カタパルトやトレビュシェットなどの投石器を使用したことで知られる。その後、城はダグラス家の手に渡り、17世紀末には廃城となり現在に至る。

### タンタロン城 (Tantallon Castle)



スコットランド最強の貴族といわれたダグラス伯爵家の本拠地のひとつ。赤砂岩で造られた巨大な城郭は今でもその威容を誇る。ひときわ目立つパービカン、そしてゲイトハウスの城壁手前には深い溝が掘られ、堡壘が巡らされているが、外郭にも堀が2重に巡らされており、城の防備を3重にした実戦的な城郭構造となっている。現在残るこの城は1350年にダグラス伯によって築かれた。ブラック・ダグラス家の9代ダグラス伯は1455年に失脚し城も放棄されたが、24年後にジェームズ3世はタンタロン城をレッド・ダグラス家の5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスに与えた。しかし、アーチボルドは次のジェームズ4世と争い、城は王の攻撃を受ける。1528年には政権を握った6代アンガス伯とジェームズ5世が再びこの城をめぐる攻防戦を繰り広げる。城は落城しなかったものの、アンガス伯は結局イングランドへ逃れることとなった。17世紀、タンタロン城はクロムウェル軍の砲撃を受け倒壊、現在の姿となった。

### スクーン宮殿 (Scone Palace)



スクーンはかつてピクトランド王国の本拠地であった。スコットランドのほぼ中央に位置し、ハイランズとローランズの両方に睨みをきかせられる絶好の地であり、王宮を開くにふさわしい立地条件であった。835年、スコット人の王ケニス・マッカルピンは母方にピクト系王家の血が流れていることを主張してピクトランドを征服し、国王となった。以後、15世紀のジェームズ4世即位まで600年にわたり、歴代スコットランドの国王はここスクーン宮殿にあるスクーン・アビーで即位。「スクーン宮殿」という名の謂れは、元々この場所は修道院長の邸宅であったが、即位するとき王はそこに宿泊したことから「宮殿」となった。アビーにはケニス・マッカルピンがアーガイルから運んできた「運命の石The Stone of Destiny」があり、歴代スコットランド王はそこに座り戴冠式を行った。しかし、イングランド王、エドワード1世は1296年に戦利品として「運命の石」をロンドンへ持ち帰り、ウェストミンスター・アビーに置いた。それでもなお、ロバート・ブルース以後もスクーンで戴冠式が行われ、最後にここスクーンで即位したのは1651年チャールズ2世であった。宗教改革によってアビーは破壊され、政治の中心はエディンバラに移り、スクーンの領地はゴリー家、そして1604年、サー・デイヴィッド・マリーの手に入った。そのサー・デイヴィッドがストーモント子爵となり、現在のマンズフィールド伯の先祖となった。現在の

スカーン宮殿は3代マンスフィールド伯のとき、1802年に中世ゴシック風の建築物に修築したもの。1996年、選挙をひかえたメジャー首相が「運命の石」をスコットランドに返還し、以後「石」はエディンバラ城に置かれている。

#### リンリスゴウ宮殿 (Linlithgow Palace)



湖畔にたたずむ宮殿の廃墟。歴代スチュアート王家ゆかりの代表的な城造りの宮殿。もともと12世紀、デイヴィッド1世がこの地に木製のマナーハウスを築いたことに始まる。その後エドワード1世がエディンバラ城とスターリング城の間に位置する地理的重要性と、周囲を湖水で囲まれる要害であることに注目して、堀と木柵をめぐらせた城郭に造りかえた。1313年、農夫ウィリアム・バノックは積み荷に味方を隠し城内に侵入、城を奪いロバート・ブルース王に提供したが、王は焦土戦を計画し、城を破壊した。スチュアート朝が始まると、ジェイムズ1世は1430年、城を石造りの豪華な宮殿に改築。以後、スチュアート王家はジェイムズ1世からメアリー女王まですべてリンリスゴウで暮らし、王宮として利用した。メアリー女王のほか、ジェイムズ5世もここで生まれている。1650年にクロムエル、1745年にボニー・プリンス・チャーリーが滞在。翌1446年、カロードンの戦いに勝利したカンバーランド公も滞在したが、同年、英軍兵士による火の不始末から宮殿は焼失。石造りの城壁のみ残されて廃墟となり、現在に至る。

#### ホルルード宮殿 (Palace of Holyrood)



王家の公式邸宅。かつてはホルルードハウスと呼ばれていたが、もともとデイヴィッド1世によって1128年、ホルルード・アビーとして築かれた。ホルルード (Holy Rood) というのは「聖十字架」のことだが、デイヴィッド1世の母マーガレット王妃がスコットランドにもたらした聖十字架に由来する、あるいは、デイヴィッド王が狩りの最中、十字架をつけた鹿の幻影を見たことに由来するとも言われる。アビーの廃墟は現在も宮殿の脇に意図的に残されている。デイヴィッド1世は付近に屋敷を構えたが、のちに規模は拡大し、次第に大修道院をしのぐ規模となった。ジェイムズ5世はさらに拡張を行い、このとき重厚な円塔が加えられ、中世城郭風の宮殿となった。その後フランスから帰国したメアリー女王がこの宮殿を邸宅するため修築。ダーンリィとの結婚 (1565年)、ジェイムズ (6世) の懐妊、夫ダーンリィによる側近リッチオの殺害、恋人ボズウェル伯との挙式 (1567年) もすべて、この宮殿内での出来事であった。現在残るバロック風建物の大部分は、チャールズ2世が17世紀に建てたものである。19世紀になるとジョージ4世、ヴィクトリア女王などが次第にホルルードを訪れるようになり、朽ちて忘れ去られた宮殿の栄華は再び蘇ることになる。北西の建物はジェイムズ5世以来の城郭造りであるが、東側ガーデンから眺める採光用の広い窓いっぱいの側面は、まったく

異質の建物のように見える。この宮殿は、中世ゴシック建築（12世紀）、ルネサンス様式（16世紀）、バロック様式（17～18世紀）、ネオ・ゴシック様式（19世紀）など新旧建築様式が混在する典型的な英国人好みの建造物の好例である。20世紀、エドワード7世はメアリー女王時代の家具や寝室を次々と復元し、現在宮殿は、エリザベス女王のエディンバラにおける公式邸宅として、毎年夏季、利用されている。なお、正式名称はThe Palace of Holyroodhouseである。

### グラームズ城 (Glamis Castle)



赤砂岩の優美な城館の上層部には、三角屋根の備わった大小の円塔が多数装飾されており、城の全体像も、中央部の一際高いタワーを中心に四方八方に広がりを見せ、雄大なタワーハウス城郭を形成している。この城は、エリザベス女王の母君クイーンマザー（2002年3月没、享年101歳）の過ごした城館として知られるが、かつてはスコットランド王家のハンティングロッジであった。14世紀、王家からグラームズ城を与えられたライアン家がL型のタワーハウスを構築したのが現在の城の原型となり、以来600年以上にわたりライアン家の居城となった。ライアン家の末裔はストラスモア伯となり17世紀に城を拡張、多くの小さな円錐塔で装飾し、優雅な美しさを漂わせた。クイーンマザーは14代ストラスモア伯の4女であり、この城で少女時代を過ごしている。シェイクスピアの『マクベス』によるとマクベス（マルコム2世

の孫）はもともとグラームズ領主であり、ここグラームズ城に住んでいた。しかし魔女に野心をかきたてられて従兄弟であるスコットランド王ダンカンを、インヴァネスの城で刺殺したとされている。実際にはダンカン王がマクベスに殺されたのは戦闘によってであり、その場所もインヴァネス城近くのエルギンである。

### バルモラル城 (Balmoral Castle)

ロイヤルファミリーの大邸宅。白色の花崗岩を使っているスクエアキープの高さは小塔を含め100フィートにおよぶ。14世紀に王家のハンティングロッジとして築かれ、その後さまざまな貴族の所有となった。1845年、ヴィクトリア女王とプリンス・アルバートがこの地を訪れ、女王がたいへんこの城を気に入り（実は女王の侍医がバルモラルの澄んで乾いた空気が、スコットランド中で最も女王の健康によいと推奨したことによる）、1852年、アルバート公は正式に土地を購入、翌年ネオ・ゴシックの城を旧城の100ヤード北西に新たに築城を着手、1855年に完成させた。バルモラル城はヴィクトリア女王と彼女の忠実なる従僕ジョン・ブラウンとの親密な関係がうわさされる舞台ともなった。バルモラル城で開いたダンスパーティーで女王はブラウンと踊り、周囲の貴族たちを驚かせたという。城は現在もロイヤルファミリーの夏季スコットランド滞在所となっている。王家の滞在中以外は一般公開されている。

### クレイギーヴァ城 (Craigievar Castle)

完璧に近い美しさを備える17世紀スコットランドL型タワーハウスの傑作。もともと17世紀始め、ジョン・モーティマーによって城が築かれたが、築城途中でアバディーンの材木商人ウィリアム・フォーブスが敷地を買い取り、1626年現在のタワーハウスを完成させた。ウィリアムの同名の息子は1630年に准男爵となり、その後20世紀にいたるまで城はフォーバス家によって代々所有されたが、1963年、ついにナショナル・トラストにわたった。城内ホルの

天井にはルネッサンス様式のカラフルな絵や彫刻が装飾されている。

### クラテス城 (Crathes Castle)

16世紀バーネット家によって建てられたL型タワーハウス。スコットランド人好みの優雅なフランス風三角屋根を髷髷とさせる小塔および屋根窓で飾られた城である。バーネット家は元々アングロ・サクソン系の騎士であったが11世紀にイングランドからスコットランドに移住してきた。クレイス城のある地はバーネット家がスコットランド独立戦争後、ロバート・ブルース王から賜ったものである。バーネット家は当初、近くの湖上に砦を築き住んでいたが、1553年に現在の城の築城を始め40年近く費やし完成。18世紀初頭、当時の城主サー・トーマスが21人の子供を抱えたことから、城を拡張する必要に迫られタワーハウスを囲んでいた城壁を取り払い、巨大な3階建ての建物(翼)を築いた。しかし、その翼も1966年の火災で焼失、現在は2階建てのシンプルな造りの建物が再建されている。

### デュアート城 (Duart Castle)



城はマル島の小高い崖縁に海を見下ろすように聳えている。13世紀、初めてこの地に城が築かれ、14世紀にラクラン・マックリーンによって現在の城の原型が築かれた。以来、城はマックリーン一族宗家の本拠地であった。ラクランは「島々の領主」マクドナルドを誘拐し、マル

島を奪い、領主の娘メアリーと結婚することを承諾させた(1367年)。これは異説もあり、メアリーとは恋愛結婚であり、領主が娘の結婚を認めないので、誘拐して父を説得したともいわれる。そして結婚持参金としてマル島をもらい、城を築き、その後もマックリーン家は島の領主マクドナルド家を支えたというのである。17世紀の内乱ではマックリーン家は王党派に属したためクロムウェル軍と戦い、城主サー・ヘクターは1651年に殺害された。内乱後、戦費捻出のため抵当となっていたマックリーン家の領地はキャンベル家のものとなり、その不正を訴え、両家は対立、城はイングランドの軍艦の砲撃を受ける。マックリーン家は1715年、1745年の反乱でスチュアート支持にまわったため、その報復で城はアーガイル公によって再度攻撃を受けた。マックリーンの領主は国外へ逃亡し、城は放置されると、連合王国政府軍の連隊駐屯地として要塞化された。1751年にはその役目も終え、城地は荒廃した。1911年、廃墟の城は26代マックリーン一族の族長サー・フィッツロイ・マックリーンによって買い戻され、城の復元作業が着手された。現在、往時の姿に戻った城郭はその曾孫サー・ラクラン・マックリーン(28代)の所有となっている。

### ダンヴェガン城 (Dunvegan Castle)

スカイ島の北西に位置する、周囲を海水湖で囲まれた小高い岩の岬に築かれたマクラウド家所有の城。築城の歴史は13世紀に初代ラウドが北欧よりこの地へやって来て、岩の周囲に城壁をめぐらせたことに始まる。一族の祖ラウド(Leod)は北方諸島の領主の娘と結婚したことによってスカイ島を手に入れた。子孫は後にマクラウド(MacLeod)を名乗るようになるが、それはもちろん「ラウドの子(孫)」という意味である。14世紀になって3代領主がスクエアキープを築く。これが現存する最も古い城の部分であり、16世紀には妖精塔(Fairy Tower)が築かれた。19世紀、ヴィクトリア時代に第23代領主が城の大規模な修築を行い、現在の佇ま

いとなった。城内に残る妖精の旗 (fairy flag) は1000年前に中東で作られた絹の軍旗で「コンスタンチノーブル」から齎したものだ<sup>もたら</sup>という。異説では、旗は城主と妖精のロマンスの末、妖精が残していったもの<sup>いくさ</sup>という。その黄色い旗を広げて振ると一族の危機は救われ、戦では幸運を齎すといわれ、代々城主は出陣するたび、旗を身につけ、現在ぼろぼろになった。1745年、カロードンの戦いに敗れたボニー・プリンス・チャーリーがフローラ・マクドナルドに助けられ、スカイ島に小船で逃走した話は有名だが、ダンヴェガン城に王子の巻き毛が残っているという。13世紀以来、マクラウド家代々の居城となり、現在に至る。

#### キルカーン城 (Kilchurn Castle)



オー湖 (Loch Awe) の端の岬にたたずむ廃墟の城。スコットランドに残る廃墟の城のなかでも美しくロマンティックな城跡のひとつである。城はサー・コリン・キャンベルによって15世紀に築かれ、5層キープが建てられた。以後代々キャンベル家が城の修復拡大をくりかえし、17世紀末一族の初代ブレドール伯が円塔3基など加えた。この城もまた大軍を迎え撃つ大城郭ではなく、盗賊やハイランダーの奇襲など、小規模な攻撃を防げる程度の小さな城である。18世紀のジャコバイト蜂起においては政府軍兵士の駐屯地となったが、以後城は倉庫機能を果たすのみとなり、1760年に廃城となる。結局この地を襲う強風や雷などの自然災害によって屋根は砕け

落ち、建造物のほとんどが破壊され、現在残る廃墟の城となった。廃墟とはいえ、醸し出すそのピクチャレスな美しさから、多くのカップルが休日などに度々クルマで訪れる。

#### イーレン・ドナン城 (Eilean Donan Castle)

湖に浮かぶ岩の小島に築かれた美しいキープを有する城郭。陸地と小島は橋でつながっている。城の起源は鉄器時代にピクト人の砦がこの場所に築かれたことに始まる。その後ケルトの聖人ドナンがこの城を隠者の住処とした。現在の城の基礎は1220年にアレグザンダー2世がデーン人 (ヴァイキング) の侵略に備えて築いたことに始まる。14世紀にはスクエアキープが築かれ、のちに城はマッケンジー伯爵家の居城として代々続く。1719年に蜂起したジャコバイトの反乱では5代伯爵ウィリアム・マッケンジーは城にスペイン人部隊を守備隊として駐屯させ、英軍との戦に備えたが、英軍は3隻のフリゲート艦で城を包囲、一斉射撃によって城は完全に破壊された。現在の城は1932年に復元されたもの。この城もまた、訪れる多くの観光客を魅了してやまない。

#### アーカート城 (Urquhart Castle)

細長いネス湖のほぼ中間地点の西側半島にたたずむ赤砂岩の廃墟の城。6世紀ピクト人の砦が築かれ、この頃アイルランドから布教活動のためコロンバがやって来、湖上に現れた怪物を見たという伝説がある。12世紀にはモット・ベイリーが築かれており、ノルマンの影響がインヴァネス辺りまで及んでいたことが分かる。今日廃墟として残る赤砂岩で築かれた城の原型は13世紀前半、アレグザンダー2世の義弟アランによって築かれたもの。城主には後にロバート・ブルースの王位継承最大のライバルとして殺害されるレッド・カミンがいる。16世紀、グラント家が4層キープを含め、現在残る城の遺構のほとんどを築く。城の縄張りの弱点としては、陸地に比べ、城の築かれた半島部分は高さがなく、また外郭よりキープのある内郭が低

くなっている所謂「穴城」であるため敵の攻撃に晒される可能性が大きかった。名誉革命によってスコットランド国内が騒然となったとき、ジャコバイトに占領されるのを恐れ、当時の領主は城を爆破し、以後廃墟となった。この城もまた、絵になるような、典型的なピクチャレスな廃墟の城である。

### カリーン城 (Culzean Castle)

18世紀にケネディ伯がロバート・アダムに依頼して本来あった中世のタワーハウスを取り壊し、新たに築かせた城館。その勇姿は城砦の風格と威厳を十分備え、一方内装はその美しい楕円形の真紅の階段や漆喰の丸天井、淡いピンクの絨毯の敷かれた円形サルーンなど、イタリア様式の華麗さはスコットランドで一番と評され、力強さと優美さを兼ね備えたカントリーハウスの傑作といえる。城址は12世紀以来、この地方を支配していたケネディー門の所有する複数(12城)の城砦のひとつで、16世紀にタワーハウスが築かれていた。18世紀になりカリーン城が本拠となると伯爵はロバート・アダムに依頼し、本格的なカースル(実際にはカントリーハウス)を築いた。第2次世界大戦でブリテン島への敵軍侵入を阻止した連合軍総司令官アイゼンハワー将軍(後の米大統領)は、カリーン城のスイートルーム生涯使用を許されたという。アイゼンハワーはゴルフ好きであり、近くのゴルフコースがお目当てでこの城を好んで利用したという。

### ダンロビン城 (Dunrobin Castle)

海を見下ろす段丘にそびえるフランス風の城館はサザランド伯・公爵家代々の居城である。もともと城は13世紀後半に2代サザランド伯ロバートによってスクエアキープ(現存)が築かれたことに始まる。19世紀に国会議事堂を設計したサー・チャールズ・バリーによって城は現在見られる白亜の城に改築された。20世紀に入り一時海軍病院として使用され、後にサー・ロバート・ロリマーによって再度修築された。こ

のとき新たに書斎や複数の部屋が造られ部屋数は180に及んだ。

### メラーステイン (Mellerstain)

ケルソの北西7マイルの地にハディントン伯爵家の大邸宅メラーステインがある。ウィリアム・アダムと息子ロバート・アダムが設計した貴族の邸宅の代表作といわれ、黄色がかった石壁の最上層に胸壁がめぐらされている以外、ゴシック趣味は排除され、変化に乏しい左右対称の構造となっている。しかし、その単調な外観とは対照的に、内装の洗練された美は訪れた人々を大いに魅了する。1909年、11代ハディントン伯の造ったイタリアン・テラス式庭園と広大な湖もたいへん美しい。

### ダフハウス (Duff House)

17~18世紀にバロック様式によって築かれたカントリーハウス。多少過剰ともいえる外壁の重厚な装飾が特色の4階建ての建物。ファイフ伯ウィリアム・ダフのためにウィリアム・アダムが設計した最高傑作と言われ、1739年に外観は完成した。内装は1750年代、1780年代、1860年代、1870年代にそれぞれ手が増えられ現在の姿に落ち着いた。当初はこの壮大な建物の左右側面に翼をそなえる計画であった。6代ファイフ伯はルイーーズ王女(エドワード7世長女)との結婚によってヴィクトリア女王の義理の孫となり、ファイフ公爵となった。

### フォート・ジョージ (Fort George)

18世紀の軍事要塞。インヴァネス寄り7マイルほどのところにカロードンの古戦場が残るが、このカロードンの戦い(1746年4月)の後、ジョージ2世がスコットランド、とくにハイランダー(ジャコバイト)による反乱を徹底的に押さえ込むため築いた近代の軍事要塞。このハイランド地方押さえの城は稜堡式築城の幾何学的縄張りであり、完成は1769年、ジョージ3世の時代となっている。要塞は当時英国の要塞のなかでも最新最強のもので、ヨーロッパ中

でも最も堅牢な軍事要塞のひとつであった。城内には砲兵隊の兵舎（1600名収容）、火薬庫、兵器庫、食料貯蔵庫、パン焼き施設、醸造所、さらにはチャペルなどがある。

## エピローグ

英城の本質は、ゲルマン系城郭とラテン系城郭の融合であり、英城郭史を学ぶということは、スラブ系を除き、西洋城郭の歴史の大半を網羅することである。翻って、日本の城郭は、歴史的に、古代より朝鮮や中国の城に影響を受けて発達し、文禄・慶長の役における実戦経験を経て、近世城郭の最高傑作を多数生み出した。しかし、それ以前、つまり、鉄砲伝来以後、日本の城は明らかに西洋城郭の影響を強く受け、発達したことを見落としてはならない。特に、キリシタン大名の築いた城は大変興味深く、重要である。鉄砲・火薬と同様、西洋築城術はわが国に間違いなく伝来したのである。日本と西洋の城郭の比較検証は大変意義のある研究テーマであるが、今回は英城郭の概要を論考した。最後に筆者が注目する日英の城郭比較のエッセンスのいくつかをここに紹介し、擲筆することとする。

①播州赤穂城と稜堡式城郭、および城代家老大石内蔵助屋敷の位置とドーヴァー城コンスタブルゲイトの役割の類似性。

②城郭ネットワークで関東支配を盤石なものとした小田原北条家とノーマン・コンクエスト及びエドワード1世の占領政策で駆使した城郭ネットワークの共通点。

③武田信玄の築城哲学と16世紀以降の英城郭史における基本的コンセプトの共通点。

④福岡城本丸と天守の位置関係および上山城天守の位置関係と13世紀以降に出現するキープ・ゲイトハウスとの共通点。

⑤駿府城輪郭式縄張りと同心型城郭の影響関係。

⑥17世紀以降日本を席卷した天守無用論と13世紀以降ヨーロッパで主流となる天守の無い城

(フラムリンガム城を中心に)。

⑦徳川大坂城本丸を囲んだ多間櫓と三層櫓11基、あるいは、仙台城本丸に並んだ4基の三層櫓の内郭構造と、同型タワーを幕壁に等間隔で並べる13世紀以降主流となる英城郭との影響関係。

⑧総構えの城（日本）と城郭都市（英国）の共通点、そしてその発展と終焉。

⑨マナーハウスと陣屋における歴史的役割の類似性。

⑩安土城天主（5層7階）とデル・モンテ城（イタリア）の影響関係の是非。

⑪家康好みと言われた白亜の城のルーツはヨーロッパの白色王城の是非。

⑫藤堂高虎の好んだ「犬走り」構造のある城郭と英コンセントリック型城郭の基本的構造との類似点と影響関係。

## 城郭用語解説

カースル (castle) : 英語で城を意味する最も代表的な語。定義は「要塞化された国王や貴族の館」。イギリスでの発音は「キャッスル」ではなく「カースル」に近い。

シャトー (château) : フランス語で城の意味を表す代表的な語。

ブルク (Burg) : ドイツ語での城の意味を表す代表的な語。シュロス (Schloß) やレジデンス (Residenz) も城を表す。

フォート (fort) : 砦、要塞。cf. hillfort, Roman fort, fortress, garrison fort など古代から近現代まで様々な用途目的に応じて用いられた語。

フォーティフィケーションズ (fortifications) : 防備施設、防御設備、軍事要塞 (fortification)。

ブルグ、バラ (burg, burh, burgh, brough, borough) : 要塞化された集落、城郭都市、自治都市。ヨーロッパ・ゲルマン系諸国において××ブルク (ブルグ) と呼ばれる地名は実に多い。

モット・ベイリー型城郭 (motte and bailey castle) : 堀で巡らされた築山と曲輪からなるノルマン様式の城。本来、築山の上に木製キープが築かれた。

コンセントリック型城郭 (concentric castle) : 輪郭式、円郭式、囲郭式城郭。

タワーハウス (tower house, peel, pele) : スコットランドの代表的な城。

ベイリー (bailey) : 城の曲輪、郭。

ウォード (ward) : 丸、郭。

バービカン (barbican) : 馬出し。またバービカンに築かれた建物自体を呼ぶこともある。

モート (moat) : 城を囲む広大な水堀。空堀にはディッチ (ditch) を用いる。

サリーポート (sallyport = postern) : 搦め手。抜け穴。

キープ (keep) : 天守 (天守閣は俗称)。cf. square keep, rectangular keep, tower keep.

ドンジョン (donjon) : キープの古称。フランス語で天守の意味。

ベルクフリート (Bergfried) : ドイツの城に備わる主塔 (天守)。

タワー (tower) : 塔, 天守, 城。円塔, 矩形塔, D型塔などある。なお, 小塔はタレット (turret) という。

シェルキープ (shell keep) : モット・ベイリー型城郭から発達したキープ。cf. ウインザー城の round tower.

ホール (hall) : 広間, 大広間 (great hall)。後に「役所」「宴会場」「廊下」「玄関」「コンサート会場」など, 本来持っていた機能が細分化, 独立, 進化し, 様々な意味を表す語に用いられ, 現在に至る。

ゲイトハウス (gatehouse) : 城門櫓。cf. keep gatehouse (天守と大手門が一体化した最強の防御設備)。

フォービルディング (forebuilding) : 付け櫓。

ソーラー (solar = great chamber / chamber = private room) : キープ最上層にある領主の寝室。その安全性から太陽光を取り入れる開放的な窓があった。

カーテンウォール (curtain wall) : 幕壁。石造りの重厚で高さのある城壁で守りの要。

シティウォール (city wall) : 市城壁。城郭都市を形成する基本。町のゲイトハウスはシティゲイトと呼ばれた。

ホーディング (hoarding) : 張り出し歩廊。木製の石落とし。

マチコレイション (machicolation) : 常設の石落とし (石造り)。

バトルメント (battlement) : 胸壁。凹凸状となった城壁の上層部全体をいう。凹部分から石弓を引き, 侵入者に対し攻撃した。16世紀以降, 装飾的意味合いが高まった。

ランパート (rampart) : 城壁の墨壁部分。上部は兵士が通る「武者走り」となっている。

ループホール (loophole) : キープなどの建造物に備えられた狭間・銃眼。

エンブレイジャー (embrasure) : カーテンウォールなどの城壁に備えられた狭間・銃眼。

ドロブリッジ (drawbridge) : 跳ね橋。引き上げ橋。

マダーホール (murder hole) : 殺人者の穴, 殺人孔。ゲイトハウスの天井に設けられた穴。ここから侵入する敵を攻撃した。

ポートカリス (portcullis) : 落とし格子。吊るし門。木材と黒鉄で造られた格子の扉門。主にゲイトハウ

スに備えられた。

コンスタブル (constable) : 城代。城主に代わって城を守る, 実質上の最高責任者。

バリスタ (ballista) : 巨大な石弓機。

バタリングラム (battering-ram) : 破城槌。巨大で重い木槌を水平にして突進させ, 城門を破壊した。

ベルフリー (belfry) : 攻城塔。移動可能な巨大な井楼。

カタパルト (catapult) : 投石機。cf. マンゴネル

トレビュシェット (trebuchet) : 振り投げ方式の大型投石機。

## 参考文献

- Brown, R. Allen. *Castles from the Air*, Cambridge University Press, 1989.
- Davison, Brian. *The Observers Series-Castles*, Frederick Warne, 1988.
- Forde-Johnston, James. *A Guide to the Castles of England and Wales*, Constable, 1989.
- Gascoigne, Christina and Bamber. *Castles of Britain*, Thames and Hudson, 1992.
- Gow, Ian. *Scottish Houses and Gardens*, Aurum Press, 1997.
- Harris, Nathaniel. *Castles of England Scotland and Wales A Guide and Gazetteer*, George Philip, 1991.
- Humphries, P.H. *Castles of Edward the First in Wales*, Her Majesty's Stationery Office, 1983.
- Johnson, Paul. *Castles of England, Scotland and Wales*, Weidenfeld and Nicolson, 1992.
- King, D. J. Cathcart. *The Castle in England and Wales*, Croom Helm, 1988.
- Kinross, John. *Discovering Castles in England and Wales*, Shire Publications, 1984.
- McKean, Charles. *The Scottish Chateau*, Sutton Publishing, 2001.
- Montgomery-Massingberd, Hugh and Christopher Simon Sykes. *Great Houses of Scotland*, Universe Publishing, 2001.
- Sancha, Sheila. *The Castle Story*, Collins, 1991.
- 西野博道著『イギリスの古城を旅する』双葉社 1995年 双葉文庫 2000年。
- 西野博道 (筆頭執筆)『戦略戦術兵器事典5 ヨーロッパ城郭編』学習研究社 1997年, 台湾版 (中国語) 2014年, 中華人民共和国版 (中国語) 2015年。
- 西野博道共著『スコットランド文化事典』原書房 2006年。
- 西野博道著「イギリスの城と城郭都市」(『21世紀イギリス文化を知る事典』東京書籍 2009年)。

追記 : 本稿で使用した写真はすべて筆者撮影のものである。